

2025年8月3日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教47「自由への招き」

出エジプト6：2～6、ヨハネ8：31～38

「真理はあなたたちを自由にする」（32節）この御言葉を教育理念に掲げている学校、大学は国内外に幾つも数えることができます。しかし真理の探究としての学問を極めれば、果たして人間は自由になれるのか。科学の最先端としての人工知能（AI）ですが、それが人間を自由に行っているかという点と必ずしもそうではない。最近では調べ物でも何でもAIに聞くそうですが、逆に人工知能に支配されている現実があります。また今日は平和主日として礼拝をまもっております。80年前に広島と長崎に人類初の原子爆弾が投下されました。この原子爆弾も当時の科学技術の結集のようなものです。科学を追求した、その先に人類は恐ろしい爆弾を作り上げてしまいました。それが学問を追求し自由になった結果なのでしょうか。それは自由ではない。死の支配があるだけです。

創世記でアダムとエバが罪を犯した時に、「その木はいかにもおおいそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」（創世記3：6）とあります。真理を探究して人間がいくら賢くなってもそれは人間を自由にしないのです。わたしたちは、人間が罪のまま賢くなったとき、そこには人間の驕りとそれによる力の支配しか生み出さないということをよくわきまえておく必要があります。改めて、イエスはどういう意味で「真理はあなたたちを自由にする」と言われたのでしょうか。

「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」（31節）イエスさまの言葉にとどまり、イエスさまの弟子になって、初めて「真理」を知ることなのです。ヨハネ福音書の冒頭でも「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」（1：17）と記されていました。またこの後イエスさまは「わたしは道であり、真理であり、命である」（14：6）と言われます。つまり真理とは、イエスさまのことであり、イエスさまの救いを通して示されることです。決してわたしたち人間が追い求めた先にあるものではありません。「真理はあなたたちを自由にする」は、言い換えれば「イエスさまはあなたたちを自由にする」ということなのです。ではそのためにイエスさまは何をしてくださったのでしょうか。

「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」（34節）ここに「罪の奴隷」とあります。イエスさまは何からわたしたちを自由にされるのか。それは罪に他なりません。ここに聖書の示す救いの根本的なことがあります。世の中には解決しなければならない問題がたくさんあります。戦争も差別も貧困もそこから自由になることをどれだけの人々が求めているでしょう。でもそれらは表面的な問題にすぎません。その根にある罪、そこから自由にならなければこの世界は何も変わらないでしょう。聖書が示す救いとは、罪からの救いであり、罪の奴隷から自由にされることに他なりません。教会はそれを救いとして語ります。

では改めて罪とは何でしょうか。創世記の物語を思い起こしましょう。蛇は「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなる」（創世記3：5）と言って誘惑します。何が善で何が悪なのか。その判断の基準が神さまではなく人間になる。そうやって神さま抜きに自分が中心になって生きていくのです。神さま抜きに生きる時に何が起こるのでしょうか。あの家出した放蕩息子のお話を思い出します。息子は父の家を飛び出して放蕩に身を持ち崩します。そこに

自由があると思って飛び出した。けれどもその結果、食べるものにも事欠き、家畜の餌を食べたいと思うほどの惨めさを味わいます。それは神さまとの約束を破って樂園を追放された人間が歩む悲惨、人類の罪の歴史とも重なるでしょう。

イエスさまは、この罪の奴隷からわたしたちを自由にしてくださいます。そのためにわたしたちのところに、この罪の世界に来られました。そしてご自身の命を持って罪からわたしたちを贖い出してくださいました。それが十字架の死です。贖うとは、買い戻すという意味があります。代価を払って買い取る。イエスさまはその命を捧げて、罪の奴隷になっていたわたしたちをそこから買い取ってくださいました。そして三日目によみがえられ、神さまと共に生きる本来の自由へと導いてくださいます。それは、家を飛び出した放蕩息子が父のもとに帰ることであり、わたしたちが失われた樂園に、神さまの御国に帰ることに他なりません。イエスさまがその道となり、真理となり、命となってわたしたちをその自由へと導き入れてくださいます。

でもそのことになかなか気づかない。自分は自由だと思っているところに厄介なところがあります。今日のところでもユダヤ人は「今までだれかの奴隷になったことはありません」(33節)と言います。自分が罪の中に捕らわれていることがわからない。だからこそ教会の存在が必要です。イエスさまは言われました。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」(31節)「とどまる」と訳された言葉メノーは、ヨハネ福音書において特に頻度が高い言葉です。この後によく知られたぶどうの木の譬えがありますが、そこで「わたしにつながっていないさい」(15:4)の「つながる」が同じ言葉です。イエスさまにつながる。教会につながる。それがイエスさまの言葉にとどまるということです。

「とどまる」と自由は矛盾しているように感じるかもしれません。でもとどまってこそきづき、体験することがあります。毎週の礼拝で、わたしたちは、自分が罪の奴隷であったことに気づかされるでしょう。けれどもイエスさまの十字架とよみがえりによって、罪から自由にされ、神さまの御心に適う新しい命にすでに生き始めていることを知るのです。わたしたちの歩みはその繰り返しかもしれません。でもそれでいいのです。イエスさまの言葉にとどまる時に、教会にとどまる時に初めてそれが可能なのです。

言葉は対話であり、人格と人格の触れ合い、交流です。神さまの言葉にとどまることは、神さまとの命の交わり、交流の中に身を置くことです。先週も地区のキャンプ、東京の出張などもあり忙しくしておりました。人との出会いや対話を通して、新たな発見があり、成長があることを実感します。それがなかったならば、わたしたちは依然と古いままでしょう。イエスさまが「わたしの言葉にとどまりなさい」「わたしにつながっていないさい」と言われるのは、その命の交わりを通して、わたしたちが神さまに向かって自由にされ、新しくされることなのです。

天の父よ。わたしたちの生きている現実には自由ではありません。様々な支配があります。どうかイエスさまの言葉にとどまらせてください。イエスさまの中に、教会の中に、とどまらせてください。そして自由を取り戻すことができますように。何より罪から自由にされている新しさを持って、この週も歩み出すことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。